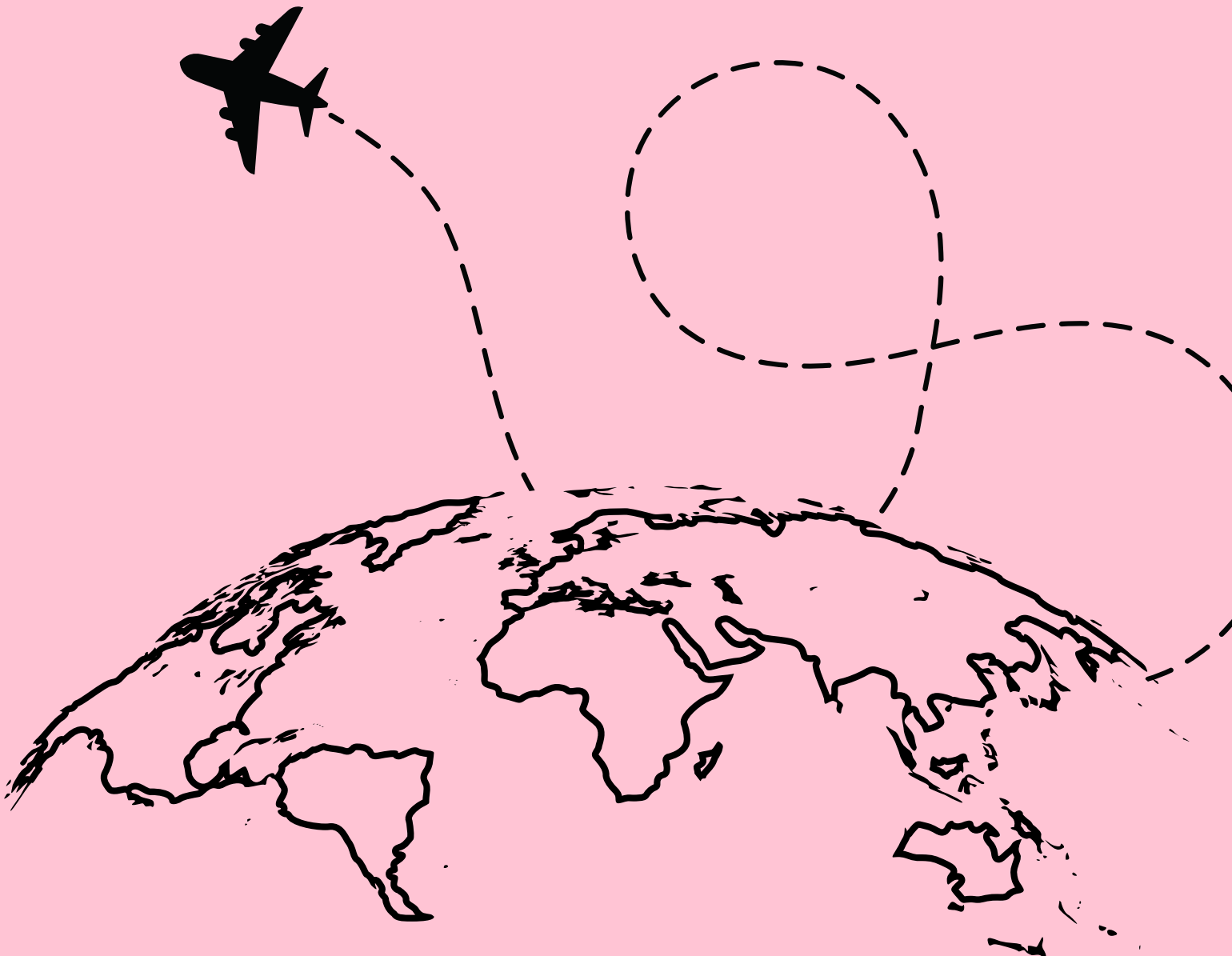




Beyond SGL

Tsumatama - Global Education Program



Otsuma Tama Junior and Senior High School

“Beyond SGL” 発刊に寄せて

校長 熊谷 昌子

2019年に発生した新型コロナウイルスはパンデミックを引き起こし、世間で言われ始めていたVUCA（不確実性が高く将来の予測が困難な状況）を想起させました。また、人や物の流れの停滞からは、計らずとも他国との連携の重要性を強く思い知らされることとなりました。もちろんコロナ発生の有無にかかわらず、超高齢化が進むこれからの日本では外国人と共に社会をつくっていくようになること、地球環境やグローバルイシュー（地球規模の問題）を他国の人々と協力して解決しなければならないこと等を考えれば、学校でのグローバル人材の育成は必須です。

では、グローバル人材とはどのような力を持つ人のことを言うのでしょうか。グローバル人材育成推進会議の「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）」定義によれば、グローバル人材が持つべき要素として以下の3要素を挙げています。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

大妻多摩中学高等学校では、“Tsumatama SGL”と銘打った、教科の枠組みを超えた教育プログラムを展開してグローバル人材の育成を行っています。SはScience Education、GはGlobal Education、LはLiberal Arts Educationの頭文字です。この中でも、グローバル人材育成の柱である“Global Education”として実施した内容を、この度、冊子にまとめてみました。あらためて冊子を見て1年間を振り返りますと、先に挙げた3要素の育成を万遍なく実施していることがわかります。

習熟度別を取り入れた英語授業での語学力育成をベースに、中学1年生が外国からの留学生と3日間に渡って交流する「プレ・エンパワメント・プログラム」の実施、オーストラリアにある「姉妹校とのオンライン交流」等を通して要素Ⅰを、各種コンテストやイベントへの参加、外国人留学生とグループを組んで広島町の巡りおよびプレゼンを行った「中学3年生の修学旅行」では要素Ⅱを、駐日ウクライナ大使やJICA職員による講演会、「東京ジャーミー見学」では要素Ⅲの育成を、といった具合です。

冒頭でも触れた新型コロナウイルスの発生により、約3年間実施を控えておりました各種海外派遣プログラムを、2023年より再開する方向で動いております。これを機に、学校全体で「中高生が海外を体験する意義」や「グローバル人材育成」についてさらに深く考え、Global Education programをブラッシュアップしていく所存です。2023度以降もこうした本校の取り組みについて、ご理解、ご協力いただけますと幸いに存じます。

2022年度 英語・国際教育プログラム 関連イベント

日付	行事	対象(人数)	
3月14日	Brigidine Collegeオンライン交流 (1回目)	高1有志(20名参加)	* HPに記事あり
4月16日	ターム留学説明会	高1・2生徒(希望者)・保護者	
5月17日	Brigidine Collegeオンライン交流 (2回目)	高1有志(20名参加)	* HPに記事あり
6月3日	Brigidine Collegeオンライン交流 (3回目)	高1有志(20名参加)	* HPに記事あり
6月25日	朝日新聞国際報道部長が語る「ウクライナ戦争」	全校生徒 (希望者)・保護者	* 生徒記事掲載
7月23日	海外大学進学協定校推薦入試制度の説明会	全校生徒 (希望者)・保護者	
7月28日	第1回ホスピタリティ甲子園 英語部門 プレゼンテーション大会	高2(3名希望者参加; 優勝者含む)	* HPに記事あり
夏休み	HLAB サマースクール (5日間)	高2(1名希望者参加)	* 生徒記事掲載
8月5日	Brigidine Collegeオンライン交流 (4回目)	高1有志(20名参加)	* HPに記事あり
8月23日	Brigidine Collegeオンライン交流 (5回目)	高1有志(20名参加)	* HPに記事あり
9月3日	大妻多摩6年国際教育プログラム説明会	全校生徒 (希望者)・保護者	
9月25日	中学生英語ディベート大会	中2(4名希望者参加)	* 生徒記事掲載
9月28日～30日	プレエンパワメントプログラム	中1学年	* 生徒記事掲載
10月2日～5日	中3修学旅行 (グローバル・キャリア・フィールドワーク代替旅行)	中3学年	* 生徒記事掲載
10月7日	Brigidine Collegeオンライン交流 (6回目:最終回)	高1有志(20名参加)	* 生徒記事掲載
10月22日	トルコセミナー説明会	中3～高2生徒 (希望者)・保護者	
10月30日	SB Student Ambassador 東日本ブロック大会	高1(4名希望者参加)	* 生徒記事掲載
11月19日	ターム留学オリエンテーション	留学生・保護者	
11月29日	英国リーズ大学に交換留学中の大学生とオンライン交流会	中2～高2生徒(10名希望者参加)	
12月10日	春休み (プレ)エンパワメントプログラム説明会	中1～高2生徒 (希望者)	
12月11日	TGG Green Springsプログラム体験	中2・中3(20名希望者参加)	* 生徒記事掲載
12月12日	駐日ウクライナ大使講演会	全校生徒 (希望者)・保護者	* 生徒記事掲載
12月20日	ターム留学生壮行会	留学生 (33名)	
12月	第61回全国高等学校生徒英作文コンテスト	高2(1名応募: 優秀賞受賞)	* 生徒記事掲載
冬休み	パスファインダークラブ (PATHFINDER PROGRAM)	高1・高2(2名希望者参加)	* 生徒記事掲載
1月21日	R5年度 グローバル・キャリア・フィールドワーク説明会	中1学年保護者	
1月28日	(株)アレスグッドCEO 勝見 仁泰氏講演 (Zoom)	中高合同学校集会	
1月28日	R5年度 イギリスセミナー(夏休み実施) 説明会	中2～高1生徒 (希望者)・保護者	
2月13日	JICA職員による「異文化理解」講演	中1学年	* 生徒記事掲載
2月16日	R5年度 スミスカレッジキャンパスツアー(夏休み実施)オンライン説明会	中2～高1生徒 (希望者)・保護者	ISA主催
2月16日	R5年度 シアトルリーダーシップセミナー(夏休み実施)オンライン説明会	中2～高1生徒 (希望者)・保護者	ISA主催
2月17日	HLAB 座談会	中3～高2生徒 (5名希望者参加)	
2月18日	「世界の教育事情と今の子どもたちが求められる資質」講演会	全学年保護者 (希望者)	ISA主催
2月20日	グローバルキャリアフィールドワーク事前学習①	中1学年	
2月21日	JICA職員による「国際理解」講演	中2学年	* 生徒記事掲載
2月27日	Brigidine College 日本語授業見学 (Zoom)	3限視聴可能学級生徒	
3月6日	外務省出張中高生講座	全校生徒 (約100名参加)	* 生徒記事掲載
3月7日	東京ジャーミィ・トルコ文化センター見学	中2～高3 (19名希望者参加)	* 生徒記事掲載
3月15日	プレエンパワメントプログラムオリエンテーション	中1～中3生徒 (32名希望者参加)	
3月16日	グローバルキャリアフィールドワーク事前学習②	中1学年	
3月17日	ターム留学生保護者会	留学生保護者	
3月18日	英国セミナー事前学習①	中2～高1申込生徒	
春休み	プレエンパワメントプログラム (3日間)	中1～中3生徒 (32名希望者参加)	
3学期	ターム留学 (オーストラリア・NZ・アメリカ・カナダ)	留学生 (33名)	* 留学生記事掲載

*** 赤字：外部国際関連プログラム**

*** 青字：全ターム留学生の「成果報告書」は図書館にて閲覧可能です。**

国際報道部長が語る「ウクライナ戦争」

6月25日（土）、朝日新聞国際報道部長の春日氏を迎え、「ウクライナ戦争」について講演いただきました。戦争に至る経緯や現状、国際法がらみの問題点など、解説していただきました。また、先日キエフ（キエフ）取材から帰国したばかりの朝日新聞映像報道部の竹花記者にも参加していただき、エピソードと共にご自身が撮られた「戦禍の肖像」を見せていただきました。現地にいらっしゃった方に様子を聞くとこの戦争がより身近に感じられ、生徒は全ての写真や動画を熱心に見ていました。

講演会后、お二人へ質問したい生徒であふれてしまいましたが、お二人には時間が許す限り丁寧に質問に答えていただきました。高校生のみならず中学生も積極的に質問し、国際問題に対する興味関心の高さがうかがえました。

また、当日の朝と講演会の際に高校2年生の有志生徒がウクライナへの募金をよびかけました。多くの生徒や保護者の方の御協力で、総額139,092円もの額が集まりました。キリのよい14万円にして、在日ウクライナ大使館へ寄付させていただきます。

「ウクライナ人は親日家が多い」、「この戦争を自分事としてとらえてほしい」、「ウクライナ人は自分たちが忘れられることを一番恐れている」といったお二方の言葉が印象的です。今回の講演で終わることなく、2学期以降も継続的にこうした機会を設けてゆきたいと考えています。

参加生徒感想（高2 Fさん）

このウクライナ情勢についての講演会では情報を発信する側の方と現地で直接取材をした方のお話を直接伺うことができ、ニュースとはまた違った視点でウクライナ情勢について知ることができるとても有意義な機会でした。朝日新聞国際報道部長の春日さんからはウクライナについての基礎知識やウクライナ戦争の概要など、朝日新聞映像報道部の竹花記者からはご自身で撮影された写真と動画と共に現地でのウクライナの方々との交流についてお話ししてくださいました。瓦礫の中を歩く映像や壁が崩れた家などの凄惨な写真が多い一方で、私たちと変わらないような笑顔で小さな子供を抱く女性の写真を見たときには日常に戦争が入り込むことの残酷さをより一層強く感じました。

私は以前から、ウクライナの人々が個人の思想や意見と関係なしにロシア人というだけでその人に理不尽な憎悪を抱き個人間の関係が陰悪になってしまっている場合があるのではないかと心配していました。講演後に竹花記者に質問をしたところ、そのように個人に対して恨みを向けてしまう人は竹花記者がウクライナで取材をした方々のなかにはいらっしゃらなかったそうです。それを聞いて私は少し安心しました。どんな状況でも怒りの矛先を向ける方向を間違えてはいけません。特にこの戦争の当事者ではない私たちが正義を気取ってロシア人の方々への誹謗中傷をすることは決してあってはならないと思いました。

また、春日さんからのロシア国内についての報道に関するお話も印象的でした。朝日新聞からロシア国内の状況を日本へ報道する際に、その報道内容をロシア当局が不適切だと判断した場合には朝日新聞ロシア支社のロシア人記者の方が拘束されてしまう危険性があるのです。そういった制限のために私たちの目に触れない情報が確実に存在するということはとても印象的で、私たちが日々目にする情報が完全ではないということを実感しました。

私は何度か今回のような国際的な問題についてのイベントに参加しており、どんな地域やどんな時代

の問題でも講演者の方々が必ず仰ることがあります。それはその問題について忘れないでほしいということです。現在世界中には様々な問題がありますが、全てがニュースで報道され続けるわけではなく多くの人々には忘れられてしまうことばかりです。学校でのこのような講演会に参加することで絶えず変化する社会に慌てることなく、直面している問題への理解を深めて将来について考えることが出来るようになった実感があります。これからも世界の動きを注視することでしっかりと自分の意見を持つことができるようになりたいと思います。



参加生徒感想（中3 Kさん）

私は戦争を経験したことがない。だが今回のウクライナ講演会で、カメラマンの竹花さんから直接話を聴くことで間接的ではあるが戦争を実感したと思う。リアルタイムで、たった数か月前にウクライナから帰ってきた竹花さんの話はとても印象的で、迫るものがあった。

竹花さんが撮った現地の人々の「戦禍の肖像」を見せてもらった。青空の下で風に吹かれている洗濯物に囲まれている強そうな60代ぐらいのおじいちゃん。周りはコンクリートの破片のようなものが散らばっている。竹花さんが説明を始めると、その人物が写真と一緒に現実として、目の前に浮き上がった。

てくる。

「彼の息子さんはロシアの侵攻によって殺され、今自分が息子の代わりにウクライナを守ろうとロシア軍と戦っています。手榴弾を投げて戦ったそうです。」

写真のおじいちゃんからは想像がつかない壮絶な話だった。戦争をしているけれど、そこで生活している人々もいる。どの写真も目が離せなかった。

私たちはニュースで大局を掴もうとするが、同時にそれは大勢の人生が複雑に絡み合っていてできているものだということを意識しないといけない。一人一人を、そこで何が起こっているのかを、初めてちゃんと見た気がする。

「不発弾とか地雷が埋まっているかもしれないから、コンクリートで舗装されていない場所は、最近掘り返した跡がないか見ながら歩くんです。」

戦争が起こっているから不発弾や地雷はあるかもしれない。だが、戦争が起きているから地面に気を付けなければいけない、という発想は私には浮かなくてこない。実際に体験した人だからこそ、生々しさをよりリアルに感じた。歴史の教科書には乗らないであろう細かいと思われるような出来事を聞けたから、私はもっとウクライナの人々に心を寄せることができた。

国際報道部長さんの説明はとても分かりやすかった。ロシアが侵攻したことについて、国連の安全保障理事国の話や、中国と台湾の関係についてもとても丁寧な解説だった。私たちが日頃接しているニュースを一側面だけで捉えないことが大切だということが分かった。これからはニュースを多面的に見ることを意識しようと思う。

おかしいと皆が分かっているのに、解決に向かわないことや、それが存在し続けるということは恐ろしいものである。今回の講演でより一層戦争はしてはいけない、平和はとても脆く守るのは大変だが絶対に大切だと強く感じた。ロシアの侵攻だけでなく、世界中で起きている紛争、戦争など様々な不条理で恐ろしい問題をこれからもしっかりと見つめて、少しでも解決に向けての行動を起こしたい。



HLAB サマースクール（5日間）@高尾

【HLAB とは】（団体紹介より）

一般社団法人 HLAB は、日本人の高校生向けに寄宿型のサマースクールを 2011 年から開催している団体です。「高校生に対して、同年代の高校生や、年の近いロールモデルとなりうるような日本人学生・海外大学生、世界で活躍される社会人の方々と交流する機会を与えることで、自分の将来について 再考し、主体的な進路選択をするきっかけを与える」ということを問題意識・目的として、東京・長野県小布施町・宮城県女川町・群馬県の 4 地域でサマースクールを開催しています。

サマースクール期間中のプログラムは、様々な学問分野を掘り下げる少人数制のセミナーや自己分析企画、また社会で活躍されている方から貴重なお話を聞けるフォーラムや、社会人ゲストの方と自分自身の悩みや将来について語り合うフリーインタラクショナルなどを中心に構成しています。大学生との交流企画や毎日夜行われる振り返り企画（リフレクション）では、プログラムを運営し、伴走する大学生が高校生に寄り添い、悩んでいることや将来のことについて一緒に考えていきます。

参加生徒感想（高2 Tさん）

私は昨年の夏休みに、HLAB サマースクールに参加しました。これは、同年代の高校生や大学生と 1 週間寝食を共にするというものでした。

そこで私が学んだことは、「人との対話の大切さ」です。サマースクールでは、毎晩班で行われるリフレクション、社会の様々な場面でご活躍されている社会人の方とのフリーインタラクショナル、海外大学生との交流、など、「人」と話す機会が多くありました。今まで学校外のコミュニティに飛び込んだことがなかった私にとって、すごく新鮮で、刺激的でした。人とコミュニケーションをとったことで、新たな自分を発見することができ、視野が広がりました。「桃子は将来、どういう人になりたいの?」「何を大事にして生きたいの?」と、今まであまり考えたことがなかったことを聞かれ、最初は上手く言語化が出来ずもどかしい思いをしましたが、対話を重ねていくうちに、自分なりの答えを出すことが出来ました。

この期間、多様なバックグラウンドを持つ人々と交流し、色々なことを吸収しました。今回私がこのような貴重な経験ができたのは、自分のコンフォートゾーンを抜け出し、挑戦することが出来たからだと思います。みなさんもこのようなチャンスがあれば、是非飛び込んでみてください。きっとそこには新しい出会いと学びがあるはずです。



中学生英語ディベート大会に出場

2022 年 9 月 25 日（日）に、第 12 回全国中学生英語ディベート大会がオンラインで実施されました。本校からは中学 2 年生の有志 4 名によるチームが出場しました。初めてのディベート大会に向けて、夏休みから少しずつ準備に取り組み、緊張をして大会当日を迎えました。

大会には総勢 31 校が参戦しており、「日本では 16 歳以下のスマートフォンの使用を禁止とする。是か非か。」という論題でディベートをしました（第 3 試合のみ、論題が当日発表される即興ディベートでした）。本校の試合結果は 2 勝 2 敗で 14 位でした。

第 1 試合では本校の立論が評価され、勝つことができました。第 2 試合では、今年の優勝校、第 3 試合では去年の優勝校と対戦しました。相手の立論に十分に反駁できず、説得力で相手に及びませんでした。第 4 試合では、相手校の強力な立論を弱める主張を少しずつ述べることができたのが、勝利につながりました。

他校のディベート部の英語力と論理的思考に圧倒されましたが、毎試合、学ぶことが多く、緊張しつつも楽しい経験となりました。また、他校の生徒の明るさ、気さくさ、ディベートの力にたくさんの刺激をもらうことができました。大会を運営してくださった学校の皆様、ありがとうございました。選手の皆さん、お疲れ様でした。

（本校ネイティブ講師よりコメント）

I am very happy to see that our debate team did so well in their first debate in the All Japan Junior High School Debate Tournament. The students worked very hard preparing for the debate and their success shows it. Judging at this event was a fun experience. I would like students to continue representing Otsuma Tama Junior High School at the tournament.

参加生徒感想（中 2 M さん）

私は 9 月に同じクラスで集まった 4 人で、大妻多摩代表として中学英語ディベート大会に出場させて頂きました。

まず夏休みから準備を進めていきました。全員で集まれる機会が少なかったり、学校の勉強や部活の合間を縫って活動する必要もあったので大変でした。また調べる時は、信頼できる出典元であるか、データが古すぎないか、相手の意見への反論に使えるかなど、様々な視点で判断しながらデータを集めるのが難しかったです。

そして本番の日、対戦校は当日発表されるのですが、歴代の優勝校や英語が有名な強豪校ばかりで全員で驚愕しました。今回が初出場だった私たちにとっては物凄いプレッシャーで緊張しました。

試合が始まると、比較にならないほどの相手の英語力に毎回驚かされていました。相手に圧迫感を与えるような、自分の意見は絶対に揺るがない強い意思を自信に溢れた話し方から感じ取る事ができ、とても圧倒されたのを覚えています。また、1 人 1 人が求められている事を理解し、迷いなくスラスラ英語を喋る姿に感心しました。

私たちの課題はたくさんありますが、特に少ない相談時間をいかに有意義に使い、説得力を持たせた発言を出来るかが重要だと思います。今回のディベートを通して学んだことを活かして、機会があればまた来年も挑戦したいです。

参加生徒感想（中２ Ｉさん）

私は、今回の英語ディベート大会で、生徒代表として出場させていただきました。結論からいいますと、めちゃくちゃ大変でした。

ディベート経験が皆無だった私たちは、二か月という限られた期間の中で準備を進めました。立論（最初にやるスピーチ）を書く上で、沢山のミスをし、英語の発音・文法なども指摘されました。立論を書くのに準備期間の殆どを使ってしまった気がします。

大会当日。対戦校が発表されたとき、私たちは心から絶望しました。相手校の殆どが、過去に優勝及び準優勝経験のある学校だったのです。正直、一勝もできないのではないかと不安になりました…。

そして第一試合が始まったとき、私たちは再び絶望しました。まず、相手の立論の完成度の高さと読むスピード、そして臨機応変な態度。一分というとても短い時間の中で、彼らは完璧なスピーチを完成させてきました。相手の反論で論破された時は、思わず頭を抱えそうになりました。だからこそ、審判から私たちの勝利を告げられたときは声を上げて驚いたものです。理由は立論が素晴らしかったから、とのことでした。休憩時間になり、徐々に勝利の実感を掴んでいき、そこで私たちは初めて希望を見ました。

第二試合は、四年連続優勝校との対戦。そして第三試合は、即興ディベートといって、昼休みの一時間という限られた時間のなかで立論を書きあげ、ディベートをするというもの。どちらも惨敗しました。もはや清々しいと思えるほどの負け具合でした（第二試合に至っては、最初から諦めかけていました）。今度こそは勝たなくてはと思いながら、第四試合に挑みました。

四回も同じテーマでディベートをしていたものですから、きっと感覚が掴めてきていたのでしょう。長いジャッジ時間を経て、審判は大妻多摩の勝利を告げました。今度は立論だけではなく、全体を見ての評価でした。

四試合という試合数の中で、私たちは二回負け、二回勝ちました。そう聞いたら、微妙な結果だな、と思うかもしれません。ですが、最初はディベートが何なのかも分からなかった私たちにとって、これは大きな功績であり、新たな可能性への一歩なのです。

多大なる情報量を使いながら、よく通る声で立論を読んできたＡさん。時に殺伐としてしまった空気を和らげ、相手の立論をねじ伏せるような反論を述べてくれたＳさん。相手の反論により傷ついた立論をカバーし、誰も聞き取れなかった相手のスピーチを拾い、メモを取ってくれたＭさん。そして、私たちをここまで導いてくれた先生方。本当に、感謝しかありません。

長くなってしまいましたが、私はこのディベート大会に出て本当に良かったと思います。もしまた機会があれば、是非とも出場したいです。



中1 プレエンパワメントプログラム

プレエンパワメントプログラムとは、外国人ファシリテーターと日本の有名大学で学ぶ海外留学生（計 30 名）に本校に来ていただき、普段授業をしている 1～6 限の時間をすべて英語のコミュニケーションプログラムに充てるという人気の大型企画です。

当日、生徒はクラスの枠を超えた約 5 名の少人数グループに分かれ、1 グループ毎に留学生がパートナーとして付き添ってくれます。留学生の方々はスペインや中国、ブラジル、ガーナ、コロンビア等々、18 カ国から来日しており、留学先の大学も東京大学や東京外語大学、筑波大学、上智大学と様々です。国籍、性別、肌の色、宗教も様々なので、多様な世界のバックグラウンドに触れるだけでも貴重な体験です。普段とは違う仲間、言語、文化……教室はまさに多様性に溢れた活気ある空間になっていました。

このプログラムの一番の目的は、「英語が通じる楽しさ」を実感することです。通じるためには、必ずしも「上手な英語」でなくとも良い、というのがポイントです。日本人はネイティブスピーカーのような流暢な英語に憧れを持ち、それ故に自分の英語（“Japanese English”）に自信を持ってないという現状があります。しかし、英語は母語としてよりも、圧倒的にリンガフランカ（母語が異なる人々が意思疎通に使う言語）として用いられているのが実情であり、今回の留学生も様々な発音・アクセントのバラエティーに富んだ英語を話していました。

そのような「多様な英語」が許容される空間で、生徒たちは知っている単語やジェスチャーを駆使してコミュニケーションを図ります。そして何とか思いが伝わった喜びと充実感を味わった時、生徒たちは「本当に大切なのは、通じ合おうとする姿勢そのものである」ということに気がついていきます。

“Be Confident (自信をもって) !”

これは留学生の方がよく口にしていたフレーズです。プログラム中では、自分の特技を披露したり、プレゼンテーションを行ったりと、あらゆる方法で自己を表現する機会が設けられています。発表の時には、留学生の方が腰に手を当てて「(自信を持って堂々とね!)」というジェスチャーを送ってくれていました。苦手でもいい、上手じゃなくてもいい。通じ合おうとする機会に中学 1 年生の時から触れていくことにより、すこしずつ自分に自信をつけていくことができるのだと考えています。今回のプログラムでエンパワーされた生徒たちが、今後の英語活動でさらに自信をつけて立派に成長していく姿を楽しみにしています。



参加生徒感想（中１ Mさん）

私は、プレエンパワメントプログラムで、英語に関していくつかの楽しさを知りました。

1つ目は、英語を話すことの楽しさです。先生やチームメイトと目を見て会話することによってコミュニケーション力が高まり、語彙力が増えました。

2つ目は、英語でミニゲームをすることの楽しさです。ゲームを通して、チームメイトとの仲が深まり、もっと英語を勉強したいと思うようになりました。

また、プレエンパワメントプログラムを体験する前の私は、英語を話すことに自信がなく、英語の授業では、小さな声でしか発言できませんでした。しかし、プレエンパワメントプログラムでジェスチャーをしながら話したり、相槌をうって聞いたりする方が相手に気持ちや意見を伝えやすくてできることに気づきました。また、プログラム後の今でも、大きな声で発言することができないので、今後の英語の授業に積極的に参加し、大きな声で発言できるようになりたいです。

プレエンパワメントプログラムを通し、もっと英語に興味を持てるようになったので、充実した3日間になりました。

参加生徒感想（中１ Sさん）

私は英語に興味を持っています。小学生から授業内で英語を学んでいましたが、面白いとは思っていませんでした。しかし、中学校に入って英語を本格的に学び始めた時、「世界の人々と会話できるって素晴らしい！！」と思いました。その時から、英語に関心を持ち積極的に取り組むようになりました。

プレエンパワメントプログラムでは、色々な国からきた留学生のみなさんと3日間という長い時間を一緒に過ごし、初めての体験でドキドキしました。また、外国の人とコミュニケーションをとることが初めてだったのでとても緊張しました。そして、徐々に留学生の皆さんと仲良くなることができ、私も少しずつコミュニケーションをとることができるようになりました。

留学生のみなさんが自己紹介をした後に、質問タイムがありました。その中でも一番印象に残っているのは、「ボーイフレンド・ガールフレンドはいるのか」と聞いたことです。その時、留学生の皆さんが驚いた表情をしていたので、みんなで沢山笑ったことが面白かったです。

そして、最終日に自分の目標や夢について英語でプレゼンテーションをしました。3日間で一番難しい課題でしたが、楽しめました！

プレエンパワメントプログラムで学んだことは、話す言葉が違って、分からなくても、伝えようとする気持ちが大切だということ、間違えてもポジティブシンキングで、気持ちを切り換えることです。いつか、私も英語で会話できるようになったら、海外に行ったり、日本とは違う文化を見つけたいです。そのためにも、これから積極的に英語の学習に取り組んでいきたいです。

中3 広島修学旅行（グローバル・キャリア・フィールドワーク代替旅行）

10月2日（日）から3泊4日で広島・神戸方面へ修学旅行に行きました。この学年は入学してから初めての宿泊行事であり、生徒たちも楽しみにしていました。グローバル・キャリア・フィールドワークの代替旅行ですので、日本にいる留学生との交流時間が多くあります。

2日目午後から国際教育プログラムが始まりました。生徒達は37班に分かれ、それぞれの班には様々な国から来日している広島大学の留学生が1名ずつ付きました。各班で自己紹介をしたり、ゲームをしたりして緊張をほぐし、お互いに親しめるような交流を深めました。3日目午前は留学生と一緒に広島市内をフィールドワークしました。広島城やおり鶴タワーなど名所を回りながら英語を使ってコミュニケーションを進め、午後は午前の活動を生かしてプレゼンをするための準備を各班で行い、発表までこぎつけることができました。

4日間の旅行の中で、普段の学校生活とは違った体験をし、たくさんの友達と語り合い、良い思い出を持ち帰ることができたことと思います。全行程天候に恵まれこの四日間は、きっと一生の思い出となることでしょう。今後の更なる成長を期待します。



参加生徒感想（中3 Iさん）

私が修学旅行で留学生とのワークショップから学んだ事は、2日間英語の環境から自然と正しい英文法が身に付けられた事です。最初は間違った英文法で会話していたのですが、留学生の方が迅速に指摘・修正を繰り返す事でコミュニケーション力も同時に身に付ける事が出来ました。この事をきっかけに英文法を正しく使える対話力やグローバル人材になりたいと思い、冬休みからは毎日30分英文法について学んでいます。英文法と語彙力を合わせる事で会話力が格段に上がる事から勉強する習慣がとても楽しくなりました。

留学生とのワークショップを通じて、自分自身を見つめ直すきっかけとなり、楽しく前向きに語学を学べるようになったのは大きな変化点だったと思います。今後も自ら考え行動をおこす人材になりたいと思います。

Brigidine College オンライン交流 2022 年度活動報告

コロナ禍での国際交流プログラムとして始めた姉妹校 Brigidine College とのオンライン交流も今年で3年目を迎えました。

今年は、全6回のオンライン交流を行い、10月7日に最終回を行いました。生徒が中心になって毎回話題にするトピックを決めてきましたが、4回目は「両校の制服と自分の好きな曲」の紹介、5回目は「大妻多摩の School tour（学校紹介）と Pictionary ゲーム」を行い、6回目には、「Brisbane と東京のお薦めスポット」についてパワポ資料を作成し、互いにプレゼンをしました。

更に今年は、9月に行われた文化祭でのプレゼンルームで、“Brigidine College オンライン交流の活動”について日本語での字幕がついたパワポ資料を作成し、英語でのプレゼンも行いました。

コロナ禍は、確かに予測できなかった事態だったかもしれませんが、予測しなかった事態であっても、そこで「より良い未来のために何が出来るか」を考え、アクションを起こすことで、新たな道が拓けていくと思います。

参加生徒より（高1 Fさん）

〔事前準備について〕

筆者は8月5日に行われた4回目を担当するグループだった。初めに、「制服紹介」と「好きな曲の紹介」にトピックを決めた。次に、2つのトピックをそれぞれどちらの言語で話すかや、具体的な行程を決めた。Google クラスルームで参加者に連絡もした。時間がない中でグループのメンバーの意見を抽出したり、それを先生とメールで相談して、実際にスケジュールを組むのは正直大変だった。しかし、自分たちでトピックを決め司会を務めたのは、自分たちで交流会を作っているのだという楽しさがあつた。また、交流会を作る過程を知ることが出来たのも今後に使えらる貴重な経験となった。

〔当日について〕

当日は筆者が司会をすることになり、初めと終わりに英語での挨拶や日本語での流れの説明を行った。正直に言うと司会の仕事は初めてでしかも英語だったのでとても緊張した。

一つ目の制服のトピックについてだ。大妻の制服の色は紺なのに対して、ブリジディーンカレッジの制服の色はグリーンだ。また、マフラーや帽子まで学校指定であった。さらに、ブリジディーンカレッジではボランティア活動などを行うとバッジが貰えるらしく、同じ小グループだった子はネクタイに5つほどどっさりバッジをつけていた。初め、どう説明したら良いかわからず、焦ったりもした。しかし、“It seems heavy.”と言うと“Yes, it is very heavy.”と返してくるなど会話が成立すると楽しかった。

二つ目の好きな音楽のトピックでは、それぞれがスマホなどで音楽を流し zoom を通して聴きあった。機械を通していたこともあり、聞こえにくいなどのトラブルがあつた。興味深かつたのは、“In Australia, not many people listen to music.”といった趣旨の事を言われたことだ。話題にするトピックも文化によって、盛り上がりやすかったり話があまり出てこなかったり、といった違いがあるのだと感じた。

最後にメインルームに戻ってから、何人か感想を言ってもらった。最後のあいさつで“Thank you for your valuable time.”と伝えた。このような貴重で楽しい時間を設けるために調整してくださった右近先生に感謝したい。

SB Student Ambassador 東日本ブロック大会参加

10月30日(日)、高1の4名がSB Student Ambassador 東日本大会に参加しました。3回目となる今年大会では、参加希望者数が昨年度より更に増え、関東圏より約280名が集まりました。全国的にはブロックは9つに増え、参加150校、参加者約1,300名だそうです。

SB Student Ambassador プログラムとは「サステナブル・ブランド国際会議」に向けて、高校生の立場から意見を発表するプログラムです。各校2名～4名のグループで応募し、他校生徒と5名～6名のグループを組み、SDGsに関するディスカッションを行います。

事前に4つのテーマから興味のあるものを選びます。本校生徒は、カンタス航空による「カーボンニュートラルプログラム SDGs への取り組み」に参加しました。普段はあまり知る機会がない、航空会社の環境問題に対する取り組みについて深く知ることができ、また他校生徒との対話を通し更に知識を深めることができました。

最後は、日本語での各グループ5分の発表です。12グループの発表があり、各グループ個性が見られました。落ち着いた生徒や場の雰囲気盛り上げる生徒など、他校の生徒の発表の仕方も大変興味深かったです。

基調講演、各企業のSDGsへの取り組み、他校生徒とのディスカッション等、どれも普段の学校生活では味わえない経験であり、参加者4名が「楽しかった!」と口を揃えて言っていたのが大変印象的です。中高生時代に様々な人に出会い、最新の情報に触れ、視野を広げる必要性を大いに感じた一日でした。

参加生徒感想(高1 Iさん)

Student Ambassadorに参加したことは、普段聞けないような興味深い話がたくさんあり、とてもいい経験になりました。特に印象に残っているのは株式会社Alliesgood代表取締役CEOの勝見仁泰さんのお話です。勝見さんは学生時代、野球を続けてきたものの挫折し東南アジアを旅したそうです。そこで、貧困、気候変動などの社会問題に実際に触れ、勝見さんの人生をかけて社会問題を解決しようと決心したそうです。また、勝見さんがおっしゃっていた、「心地良い場所にとどまらず、心地の悪い場所に自ら出ていく」という言葉がとても印象に残りました。なぜなら、私は今まで挑戦したいと思っていても、一人で挑戦するのが怖くて挑戦せずにいました。けれども、今年はいろんなことに勇気を出して挑戦してみました。Student Ambassadorに参加したのもその一環でした。いろんなことに挑戦するとき、最初はいつも緊張をして本来の自分を出せずにいました。出してしまうと、話がうまくつながらないかと不安だったからです。しかし、勝見さんのお話を聞いて、自分をきちんと出していけるのだと自信を持つことができました。心地の悪い場所は自分を高めてくれることがよくわかりました。なので、これからもいろんなことに挑戦していきたいと思います。



Tokyo Global Gateway (TGG) Green Springs (in 立川) 体験

12月11日、中2・中3の約20名で、2023年1月16日にオープンしたTGG Green Springsのプログラムを体験しました。オープン前の施設を本校がトライアル校として利用でき、生徒も興奮している様子でした。

事前に2つのセッションを選び、最初に「エアポートシーン」、次に「TGGで多文化理解」を体験しました。どちらも英語で自分の課題に取り組み、言葉が通じた時には生徒の顔に笑顔が見られました。実施後のアンケートを見てみると、「実際の場面に即したセットで講師の先生と英語が使えて楽しかった。是非また来たい!」という意見が多かったです。

TGGは2018年、江東区青海に既にオープンしています。今回多摩地区で新たに開業ということで、多摩独自のプログラムにも大変期待を寄せています。来年度以降長期休暇などに、生徒がまた体験できる機会を設けたいと思っています。

参加生徒感想（中3 Mさん）

I joined an English program at Tokyo Global Gateway.

The first thing we did in the program was to introduce myself to my group members, and we played a simple game with a foreign teacher. Foreign teachers were very kind and friendly. They made an easy-to-talk atmosphere for even students who are not good at speaking English in front of everyone.

I thought that the mission at a foreign airport was the most impressive. The inside of the airplane looked realistic. I told the cabin attendant what I wanted to buy. A foreign teacher gave me some advice before communicating with the cabin attendant. I was a bit nervous, but I felt glad I could buy what I wanted with my English skill.

In the afternoon, we watched a video about the difference between Japanese and foreign cultures. I learned that gestures, which are natural in Japan, sometimes cannot be understood in other countries. It was so interesting. It made me even more interested in foreign countries.

Through this program, the pleasure of talking with foreign people and my confidence grew. And at the same time, my desire to learn many things by going abroad was advanced. I think that this program gave me a good effect.



駐日ウクライナ大使講演会

12月12日、セルギー・コルスンスキー駐日ウクライナ大使が来校されました。本校では、1学期に朝日新聞社国際報道部長春日氏、同記者竹花氏にウクライナ情勢に関して講演していただき、ウクライナ支援として集めた募金を「ウクライナ大使館」へ寄付させていただきました。そのご縁で「大妻多摩」に親近感を持っていただき、初の高校訪問先を選んでいただきました。

講演会当日、翌日の朝、生徒・保護者の方々には多くの募金に協力していただき、感謝いたします。1学期同様、大使館に寄付させていただきました。



参加生徒感想（高2 Fさん）

ウクライナとロシアの戦争についてその当事者であるウクライナの大使から直接お話を聞くことができて、とても貴重な時間を過ごすことができました。

ウクライナの伝統文化のお話はとても興味深く、特に美味しそうな伝統料理は実際に現地に食べに行きたいほどでしたが、戦争の影響でそういった文化的な活動が消極的になってしまっていることには本当に心が苦しくなりました。

特に印象的だったことは、人道支援に加えてこれからは荒廃した都市の復興の支援も重要になってくる、と大使がおっしゃったことです。「復興」という言葉から、どのような状況でも人々の暮らしが未来へ続いていくことを改めて実感しました。

また大使は、素晴らしい技術を持つ日本の会社にウクライナの復興を助けてほしい、と続けておっしゃいました。日本の技術が、辛い思いをした方々に再び立ち上がる力を与えることが出来るとしたら、それは本当に素敵なことだと思います。

ウクライナにもロシアにも、大切な人や物を失って苦しんでいる人は大勢います。この戦争が一刻も早く終結して傷ついた方々が平和を取り戻せることを祈っています。

参加生徒感想（高3 Sさん）

I would like to start by saying that this lecture was a very valuable opportunity for me and I am fully grateful for having me as a chairperson.

When I first knew that the ambassador of Ukraine was coming to our school and giving a lecture directly to the students, I was very surprised. At the same time, I was very nervous to serve as a chairperson in such an important event.

The ambassador started off his lecture with a little introduction about his country. He explained that the landscape, the traditions and even the culture in his country were very similar to the ones in Japan. I never knew that a country in Europe, a country like Ukraine, shared a lot of similarities with my country. Then he taught us about the current situation in Ukraine. The pictures of damaged schools and hospitals were unbearable to see, and the number of casualties the attack cost was more than shocking. Moreover, I was so disappointed to hear that hospitals and fire departments were destroyed before anything else so that people in Ukraine will be short of help or supplies to live through the attack. After the lecture, I realized that I had little knowledge about Ukraine itself and about the disaster. This opportunity was a wake-up call for me to get thorough the information about this war, and to take real actions to help the people in need.

It has been nearly a year since the war was started on Ukraine and it has caused a great deal of damage, let alone severe chasm between nations. And it is about time to stop this horrible war. There is not much that we can do to directly stop the war; however, we can support the people in Ukraine by sending supplies or donating money to rebuilt the country.

To close, I would like to appreciate again for this opportunity and really hope that the world will come to peace again.

第 61 回全国高等学校生徒英作文コンテスト 優秀賞 受賞！

本校では例年、全国英語教育研究団体連合会（全英連）が主催する英作文コンテストを生徒たちに紹介しています。この英作文コンテストは、昭和 37 年より文部科学省他の後援を得て実施されてきたもので、今年の「2・3年の部」には1,045名の応募がありました。大妻多摩からは、昨年初めてこの大会で入賞者が出ました。今年は高校2年のSさんが「2・3年の部」に挑戦し、全国で、最優秀賞1名に次ぐ優秀賞5名のうちの一人に選ばれました。

今年のお題は “A local problem we should solve” でした。Sさんの英文は、子ども食堂でのボランティアの実体験に基づいており、どのような支援をしているかが具体的に示され、説得力があることが評価されました。身近な社会問題に高校生としてどのように取り組めるか、また、行動を起こすことの大切さを考えさせられる内容です。最後に、今回の大会に出場してみた感想をSさんにまとめてもらいました。ぜひ後輩の皆さんも次年度以降、この大会に挑戦してみてください！

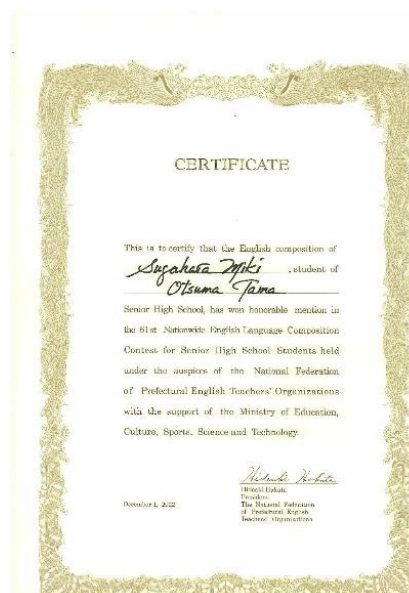
受賞生徒感想（高2 Sさん）

今回このような素晴らしい賞を頂くことができ、とてもうれしく思います。

夏休み前にこのコンテストについて知ったとき、“A local problem that we should solve” という今年のテーマが、私が興味をもっており将来も学んでいきたい分野であったので、ぜひ挑戦してみたいと思いました。

作文は自分が子ども食堂のボランティアを通して感じたことや考えたことをまとめたものですが、600語もの長文の英作文を書くのは初めてでしたし、決められた語数の中で、読んでくださる方に少しでも自分の思いを伝えるためにはどのような表現を使えばいいのか、その選択に苦労しました。しかし、そのように迷路に迷い込んでしまった時にも、学校の英語の先生から励ましとアドバイスをいただき、なんとか自分の納得のいく作品を書き上げることができました。

今回のこの経験を通して、私は大切なことをいくつも学びました。英語のたったひとつの単語が持つ深い表現、作文をまとめていくうちに見えてきた自分の将来、そして最後まであきらめないで挑戦を続けることの大切さ。今回学んだこれらのことを自分の大切な宝物にして、これからもいろいろなことに挑戦し、学びを深めていきたいと思います。



パスファインダープログラム (PATHFINDER PROGRAM) 参加

【プログラム目的】(ISA 紹介文より)

- ▶大きく変動するグローバル時代において、「自己の特性と能力を最大限に開発し、それらの積極的な活用と他者との協働を通して、より良いグローバル 社会の構築に貢献することができる」ということを理解する。
- ▶自分の興味や特性を活かした Life Path(人生)と Career Path(職業)の 選択とデザインを思考する。また、それらを実現するために必要な自己変革 に取り組むための基盤作りに取り組む。
- ▶参加者 6 名程度につき 1 名の外国人留学生 (グループリーダー) 参加。



参加生徒感想 (高1 Hさん)

このプログラムに参加して面白かったことは、英語で「人生の意味、生き方」を学べたことです。仕事について、人生の生き方、問題への取り組み、考え方を仲間とグループディスカッション、最後に発表をしました。

これまで私は面白そうだからという理由で人とは違う変わった仕事をしたいと思ってきましたが、このセミナーを経て違う考え方を学びました。

- ・死ぬ時に「いい人生だったな」と思えるのは、人のためになることを仕事にした人だということ。
- ・私たちの生活は、大勢の人々によって知らず知らずのうちに支えられている。だから、いつも支えてくれているそれらの人に感謝することが大切。誰にでも社会に貢献できることがある、という発見もありました。そして、「私も支える側の人になりたい、そういう仕事をしたい」そう強く思いました。

セミナーに参加した他の学校の人たちと夢を語り合い、分かち合ったこと、それは私にとって未来につながる宝物になりました。みんな自分の野望を持っていて、自分の夢を持つ勇気を持てました。色々な可能性を感じられたことで、少し自分の将来が楽しみになりました。

また、海外の学生の背景を知ることによっていろいろな人生があること知り、興味深かったです。

やはり、英語はただの言いたいことを伝えるための媒体です、普通に英会話を勉強するよりも英語を通して人生について考えることができ、とても面白く感じ、有意義な時間を過ごすことができました。

【中 1】JICA 海外協力隊の方による「異文化理解」講演

2月13日（月）、国際教育プロジェクトの一環で、「異文化理解」に関する講演を聞きました。講演された方は、JICA 海外協力隊の一員として、2018年～2020年の3年間、フィジー共和国で病院内栄養士をされた方でした。国際協力に興味を持ったきっかけ、フィジー共和国について、壮絶な環境で過ごすことで気づいた大切なこと、「多様性」を理解する重要性など、中学生が理解できるように丁寧に話していただきました。

現中1は来年度夏にオーストラリアへ修学旅行（グローバル・キャリア・フィールドワーク：グロキヤリ）に出かけます。本校では、海外修学旅行は初めてのことです。日本の当たり前は世界の当たり前ではありません。修学旅行に行く前に意識すべきことも教えてもらい、非常に有益でした。

常に様々なことに「問い」を持ち、来週から始まるグロキヤリ事前学習へ意欲的に取り組んでもらいたいと思います。

参加生徒感想

私はフィジーや環境問題のお話を聞いて、驚いたことが3つあります。

1つ目は、ほとんどの国が蛇口をひねってもきれいな水が出てこないことです。日本では蛇口の水をそのまま飲むことができるので、普通店で水は買わないのですが、海外では店で水を買うことがほとんどだったので驚きました。

2つ目は、ほとんどの国で人権や健康、生活があまり守られていないことです。アフリカがとても危険な状態であることは知っていたのですが、先進国以外の国ではほとんど守られていないことを知り、とても驚きました。

3つ目は、2020年以降も飢餓が続いていることです。私は毎日ご飯を食べることができていますが、9人に1人が飢餓状態であることを知り、とても驚きました。

今回のお話を聞いて、世界の多くのことを知れて良かったです。初めて知ったことや驚いたことがたくさんあり、こんなにも世界のことを知らないということに気づきました。



【中 2】JICA 海外協力隊の方による「国際理解」講演

2月21日、中学2年生は国際教育プログラムの一貫として、イエメンに2年間の滞在経験のあるJICA 海外協力隊の方の講演を聴きました。イエメンという国について、聞いたことがない生徒がほとんどの中、イスラム教徒の女性が着用する衣装の着方や着用する意味についてお話されると、生徒は異文化の世界に次第に惹き付けられていきました。日本人の9割はイエメンについて知りませんが、イエメンの人たちは「日本が安全で信用できる国なので大好きだ」ということにも驚きました。

海外の異文化社会では、「普通であること」がそれぞれ異なります。日本とはちがう異文化には必ず理由があり、その理由に疑問を持つこと、また答えを得ようとするのが大切だと知りました。現地では、常に「おじゃまします」の精神で、「自分も相手も大事にすること」が重要だということです。

本日教えていただいた事を念頭に置き、今後の国際教育プログラムに積極的に参加してほしいと願っています。



生徒感想①

イエメンの人と日本人との文化の違いを知れて良かったです。言語も宗教も文化も違っているので、お互いを理解して生きていくのはとても大変だけど、大切なことだと思いました。前からイエメンの人たちが全身を布でかくしている理由が気になっていたのですが、日本人が水着で授業を受けていたらどう思うかという話がわかりやすかったです。自分でも他の国の文化を調べてみようと思いました。

生徒感想②

イエメンの服の話をしてくださったときに、「お邪魔します」の気持ちでイエメンの服を着たということを知って、尊重し合うというのは、それぞれがそれぞれの服を着ることだと思っていたけれど、着てみて初めて分かることもあるだろうし、現地の人と一緒にしてみたいと思って良かったです。このような国際的な仕事のみで活動することに少し抵抗がありましたが、数年単位でなら、やってみたいと感じました。

生徒感想③

宗教の考え方によって、生活が多方面に変わってしまうことを知った。土地などの環境でも考え方は多くなるし、変化することを知った。リアルな開発途上国の現状が知れてとても面白かった。言葉の意味も考えさせられた。

外務省主催「(中)高校講座」

外務省職員の山崎氏による講演会が行われました。実施日は、登校義務がない日であったにもかかわらず、100名を超える希望者が集まりました。内容は主に外務省の仕事内容についての紹介でした。事前に参加予定者から聞いてみたいことについてアンケートをとり、その内容にもこたえる形で、山崎氏には、様々な疑問に答えてもらいました。全体講演会后、特に関心が強い高校生に人数を絞り、座談会形式でさらに突っ込んだ話をしてもらい、あっという間に時間が過ぎてしまいました。事後アンケートでも質問が多数あり、それに真摯に応えて下さった山崎氏に感謝するとともに、本校生徒たちのグローバルな仕事に対する関心度の高さを感じる機会にもなりました。

生徒感想①

外交を行う上で1番大切な事はコミュニケーションであるということから、外交とは人間関係の延長であることが分かりました。他国間の戦争を終わらせなければなど気負う事なく、草の根レベルで私達ができる事は、他国について悪い感情を抱きそうになった時、その考えに至るにあたって収集した情報は、本当に正しいのか慎重に考える事だと思いました。

生徒感想②

私たちがニュースで見ているような内容を実際に携わっている方にお話を聞くことができとても多くのことを学びました。外交官の仕事だとは思っていなかった内容までやられていて驚きました。まだ今の私には世界をまたにかけるといふ実力も勇気もありませんが、この機会に自分の将来についてもう一度考えてみようと思います。本日は貴重なお話をありがとうございました！



東京ジャーミィ・トルコ文化センター見学

3月7日（火）イスラムに対する理解を深めるため、代々木上原にある「東京ジャーミィ・トルコ文化センター」を参加希望者19名で見学しました。「ジャーミィ（Camii）」はトルコ語で「大規模なモスク」を意味し、「人の集まる場所」を意味するアラビア語を語源としていわれています。

本校では、海外プログラムの1つとして「トルコセミナー」を十年前より実施しています。今春も実施予定でしたが、昨年11月中旬に発生したテロにより、残念ながら中止となってしまいました。先月トルコで起こった地震にもシンパシーを感じる生徒・保護者の方が多く、募金活動を積極的に行っています。

最初に1階のホールで東京ジャーミィの広報・出版担当の下山さんにイスラムについてレクチャーしていただきました。下山さんには前回の2021年12月の見学時にもお話いただきましたが、今回も大変熱がこもっていらっしゃり、1時間のレクチャーがあっという間でした。

その後、2階へ移動し、女性は持参したスカーフを頭に巻き、神聖な場所である礼拝所で、午後3時の礼拝の様子を見学しました。日本文化の茶道のように、フォーム（形）が重要であり、またそれぞれの形に含まれる意味を聞き、歴史と奥深さを感じられました。小さな男の子も成人男性と一緒にしてお祈りを捧げている姿が大変印象的でした。

見学後はジャーミィ内に併設されているハラル・マーケットでイスラム圏の物産の買い物を楽しみました。最近有名になりつつあるトルコの伝統菓子「バクラヴァ」を教えてもらい、お土産に購入する生徒が多かったです。

東京ジャーミィは某旅行サイトでは、無料のおすすめ観光スポット第4位に選ばれているそうです。その空間を尊重できる人であれば、誰でも見学できます。今回参加できなかった人も、是非個人で見学してみてください。また、来年度は「トルコセミナー」を実施する予定です。1890年に起こった「エルトゥールル号遭難事件」により、トルコには親日家が大変多いです。なかなか触れる機会の少ないイスラム文化について、調べ始めてみましょう！

生徒感想

礼拝堂はとても心地よい空間でした。神の前では人は小さな生き物で、地球の人々は皆仲間だというお話がありましたが、礼拝のとき、信者の方たちが変に間を空けたりせずに密接して並ばれていて、きっと皆さんは心を許し合っているのだらうと思いました。私は人と関わるのが苦手で、すぐに嫌になってしまうのですが、そのような考えは改めてみようと思いました。行って良かったです。



ターム留学復活！ 高１・高２の計３３名が３学期に海外へ！！

12月20日（火）、「ターム留学壮行会」を開きました。3年振りにターム留学を実施することができ、今年度は過去最高人数の３３名が３学期を海外で過ごすこととなります。校長より「留学許可書」が手渡され、出発が迫ってきたと実感したことでしょう。学校としても国際教育プログラムの復活を大変嬉しく感じています。

留学生は４月に志望理由書を提出し、第１次選考、第２次選考を通過し、７月に合格通知が手渡されました。その後、各コースの事前学習に積極的に参加し、先週には、留学中のレポート提出に向けて、「興味のある分野」について１分間スピーチをしました。全員の高い意識が見られ、「探究型留学」を実践してゆけるようです。

オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダへ出発する皆さん、現地で多くのことを吸収し、元気な姿で来年４月に大妻多摩に戻ってきてください！



オーストラリアコース留学生 中間報告書より１部抜粋（高１ Fさん）

◎学校について

BRIGIDINE COLLEGE の制服は緑色のワンピースに麦わら帽子です。私はひと目見たときからずっと BRIGIDINE COLLEGE の制服かわいい!着たい!と憧れていたもので、毎日着るたびに気分が上がります。髪には、学校指定のリボンやシュシュをつけることができるとてもかわいいです。校則は日本ほど厳しくなく、ピアスをしている人やメイクをしている人が多く最初は驚きました。

次に授業についてです。まず、ここでの授業は基本すべてパソコンで行われます。ホワイトボードはありますが、先生方は事前に用意した OneNote などを前に映して使用します。生徒も同様に、ほとんどノートではなくパソコンに書き込みます。私達には決まった教室はなく、自分から指定された教室へ移動します。Math や Science は日本で習った範囲であるため理解できますが、Humanities や Religions は日本にない教科の上に、先生が前で話しそれに答える授業の仕方なので理解が難しいです。選択授業の Japanese は海外での日本語の教え方を知ることができるのでおもしろいです。私の学年はオノマトペや文の組み立て方について習っています。たまに曜日や季節の歌を聞いたり、ラジオ体操をしたりします。「ありがとう」や「すごい」など、日本語を使って話しかけてくれるのですごく嬉しいです。PE は

毎回違う運動をします。なかでも印象に残ったのはバレーボールです。私はバレーボール未経験者だったのでボロボロだったのですが、打ったボールがコートの外に出てしまっても「ボール打ててたよ!すごい!」とまわりの人が言うてくれました。また、道具を使って自由に遊ぶという授業では、道具の中に柔らかい棒があったため、1回だけ1スピンの(バトンの技)をしてみました。するといつのまにか友達が集まっていて「すごい!!教えて!」と言うてくれました。目が合うとニコッと笑いかけたり、笑顔で手を振ってくれたりする優しい生徒がたくさんいます。最初は学校で常に緊張していましたが、今は学校が楽しいです。

ここでの充実した生活を支えてくれている家族やホストファミリー、友達に感謝の気持ちでいっぱいです。残り約1ヶ月、めいっぱい楽しみ成長して帰ります!

オーストラリアコース留学生 中間報告書より1部抜粋 (高1 Mさん)

私の留学の観点である「オーストラリアの幸福度ランキングが高い理由」について分かったことを紹介します。私は、その理由を恵まれた自然環境と多民族国家ならではの他者への寛容さだと予想していましたが、ホストファミリーに聞いてみたところ新たなことが分かりました。

ホストファミリーの全員がオーストラリアの自然環境を挙げていました。実際、気温は35℃を超える日もあるにも関わらず湿気がないため、外でリラックスしている人が多いです。驚くことに、他者への寛容さと答えた人はいませんでした。しかし、現地の人々は英語が流暢でない私と話してくれたり、個々の違いを尊重するという考え方を学校の授業で感じたりしました。よって、現地の人々は様々なバックグラウンドを持った人々と生活をしているので、他者との違いを認めるのは彼らの中では当たり前になっているのだと思います。

そして、その日常に溢れている他者への寛容さが、人々の幸福に繋がっているのだと考えます。また、インタビューで、オーストラリアの政府の政策という新しい理由を知ることができました。例えば、新型コロナウイルス流行時の給付金がかかり多く、国民の健康に対する保護が手厚いことが分かりました。なので、そのような政策が国民のどのような行動に繋がっているのかを、家族や学校の友達、先生にもインタビューをして調査したいと考えています。



ニュージーランドコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高1 Kさん）

語学学校に着いて、オリエンテーションを受けた時、現地の英語の訛りを初めて耳にし、聞き取ることが難しく、この先のニュージーランドでの暮らしが、とても不安に感じた。ホストファミリーと合流し、家に向かう途中、不思議な交通整備の仕方をしていて驚いた。交差点のところに円を作り、そこを回る事で方向を変える。それによって信号を使用しなくて済む。日本もその方法を用いれば、電力の節約ができるのではと考えた。

語学学校では、日本から来ている人や、韓国から来ている人もいた。歳もバラバラで様々な人と交流することができた。ホストファミリーのことや、ここでの暮らしの様子などを他の生徒と共有できたことが嬉しかった。授業では現地で使う言葉を学んだり、実際に生徒同士で話して、会話の練習を行ったりした。他にも、ニュージーランドの歴史など、国の情報も知ることができた。しかし、授業は全て英語で行うため、聞き取るのにすごくエネルギーを必要とする。思っていた以上に脳の疲れを感じた。

授業の中で、図書館に行くことがあった。図書館の中には、マオリの本が置いてあるゾーンがあった。街中でも、よくマオリ語を見かける。ニュージーランドの人口の7%ほどをマオリの人々が占めている。ニュージーランドの人々が、先住民族の文化をととても大切に思っているということを感じることができた。

学校の後、友達と近くのショッピングモールに行き、買い物をした。全てが英語で書かれているため、どこに何があるのか読み取るのに、とても苦労した。また、商品のデザインがカラフルなものが多く、日本人との感覚の差を感じた。雑貨が売っている店に行った時、サンリオなどの日本のキャラクターの商品が売っていた。ニュージーランドでも日本のものが、人々に親しまれていると知り、嬉しく思った。また、日本と比べて少しだけ物価が高い。シュシューつでも千円ほどして、日本の百円ショップのありがたみを感じた。

毎日、ホストファミリーの家まではバスを利用した。バス運転手の方が、ラジオや曲を、音を出してかけていて驚いた。窓がとても大きく、座席も広いが、日本と比べて利用客が少ない為、広々としているように感じた。

ニュージーランドは、他の国と比べて、治安がいい。そのため、小さい子が一人でバスを利用していたり、子供だけで遊びに来ていたりする。また、お店などでわからないことがあり、質問をした時、丁寧に答えてくれた。二週間で何度も、ニュージーランドの人々の暖かさを強く感じた。

実際に、ホストファミリーと会話をするとその難しさをよりはっきりと感じた。紙の上で文を作る時とは全く違って、頭が上手く動かず、文を構成できなくなって、最終的に簡単なことしか話せなくなる。そして、話せないのが怖くなり無意識のうちに会話を早く終わらせるようにしてしまう。また、コミュニケーションにおいての感情表現の仕方が日本とは全く違う。日本では、話す時相手が不快にならないように、微笑みながら話を聞いたり、相槌をする時、よく笑ったりして反応する。しかし、ここでは本当に面白いことがあった時などしか笑わず、愛想笑いというものをあまりしない。その文化の違いにより、感情を上手く読み取ることができず、ストレスを感じてしまった。三ヶ月間のうちに、緊張せず話せるようになるために、会話に慣れ、単語力をつけ、会話表現を自分で勉強するようにしようと思う。

日本に帰ってきた時、この留学期間の経験が、一生の宝だと思えているように、精一杯頑張ろうと思う。

ニュージーランドコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高2 Aさん）

ニュージーランドにきて一番驚いていることは、自分がよそ者だという感じがしないことです。親元を離れて外国に行くともっと孤独感を感じるものだと思っていましたが、どこでも多種多様な人々が当たり前共存し、人と違うことが当たり前であるこの国では、むしろ日本にいた時より自分を認められ、そしてより他者を尊重する気持ちが生まれているような気がします。レジで買い物をするときも、まずは目を合わせてあいさつし、最後は笑顔でお互いにお礼を言います。人とのコミュニケーションの大切さを改めて感じるとともに、今日の前にいる人を尊重する気持ちを日本に帰っても忘れずにいたいと思っています。バスのタイムテーブルがコロコロ変わること、好きな服が着られること、英語が母語でない人も多く完璧な英語を話せなくてもあまり恥ずかしくないことなど、毎日発見があります。

語学学校の授業では、リーディングのほかにワードゲームやちょっとしたお題についての話し合いを通して英語を学んでいます。同じクラスには日本人と韓国人がいますが、韓国から来た生徒と話すときは英語での意思疎通の難しさを感じる一方で、通じた時には、違う国から来た同年代の人と何気ない会話ができることをとてもうれしく感じます。中には日本語が少しわかる人やわずか13歳で留学している人もいて、多くの刺激をもらっています。

ホストファミリーとの生活は、最も難しく感じていますが、どうすれば言いたいことが誤解なく伝わるか、どうすればお互いに気持ちよく生活できるか日々試行錯誤しながら学んでいます。いまだにホストファミリーが話しかけてくれても思うように話が続けられなかったり、何かしてもらっても十分に感謝の気持ちを伝えられなかったりしてもどかしさを感じることはありますが、ホストファミリーとの生活の中で英語を吸収しているからか、最初のころよりだいぶコミュニケーションが取れるようになってきたと思います。見知らぬ私を受け入れてくださったこと、私のつたない英語にも真剣に耳を傾け、英語でコミュニケーションをとる勇気をくださったことに、本当に感謝しています。

現地校に移ってから、オークランドで学んだことを生かしつつ、新しいことに挑戦していきたいです。



アメリカコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高1 Sさん）

まず始めにホームステイについてです。私は今回人生初ホームステイでした。アメリカに着いた時は楽しみというより緊張の方が大きかったです。しかし、ホストファミリーの方々はとても優しくかったので安心しました。ホームステイを通してアメリカの文化や日本の素晴らしさを知ることができたのでホームステイはとても価値がある経験になると思いました。シャワーはなるべく5分以内に入り終えることや食事が質素だということは留学する前に知っていたのですが、実際に体験すると日本は贅沢な国だなと思いました。それと同時にこの経験を16歳で出来たのは本当に有り難いと感じました。また、私のホストファミリーはメキシコ人なのでスペイン語が第一言語です。英語がスペイン語訛りなのは今でも慣れませんが、これも私が留学しているサンディエゴはメキシコとの国境近くなので体験できたことだと思います。

私は生徒数が約2300人の学校に通っています。アメリカの学校は日本の学校と大きく異なります。アメリカは多民族の国なのでフィリピン系、ヨーロッパ系、アジア系など本当にたくさんの人種の方々がいます。学校はまるで海外ドラマに入り込んだかのような雰囲気です。自分の教室はなく、授業終了のチャイムがなったらすぐに教室を出ます。昼ごはんはほぼ毎日ピザ一枚でそれを外で立ちながら食べます。アメリカ人は一日中元気です。日本と違い服装も自由、授業中にスマホやお菓子OKです。何にも縛られないアメリカの雰囲気が私はすごく気に入っています。

アメリカは1人の留学生につきバディがつくというプログラムなので私はバディに本当に助けられたなと思いました。私は英語はあまり得意ではなかったのでスラスラと英語を話すことはできなかったのですが、私の下手な英語でも一生懸命聞き取ろうとしてくれました。私は英語が話せなくても伝えようと思いそれを相手に感じさせることが大切だと気づきました。バディ以外の子でも日本の音楽やアニメ、洋楽、K-POPが好きな人はたくさんいるので話を膨らますことが出来ました。アメリカでは何も話さないと相手にされないで、日本のように受け身でも何とかかなるという考え方ではなく、とにかく自分の思ってることや意見を人に話すことが大切だと知りました。

放課後にバディの子達とショッピングに行ったりバスケの試合を見に行ったりしてとても充実した日々を送っています。授業スタイルも日本と大きく異なります。よく知られているようにアメリカの授業は参加型です。先生が問いを出しそれについてみんなで考える授業もあれば、各自の課題に取り組む授業もあります。みんな授業に積極的でたくさん発言をし、寝てる人はいません。私がアメリカの授業で一番楽しかったのはビジネスの授業です。その授業ではみんなでビジネスゲームをしました。ビジネスの仕組みをゲームを通して楽しみながら学ぶことができました。

留学生活はまだ一ヶ月半ほどあるのでこれからも日本ではできないいろいろな経験をしようと思います。



アメリカコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高1 Fさん）

○気づいたこと・日本と違う点・意外だったこと

「学校」

- ・机と椅子がくっついている。
- ・敷地内はほぼ屋外で、教室が並ぶ平屋のような建物がいくつかある
- ・机の裏に誰かがかんだ後のガムがくっついている
- ・授業中にお菓子を食べていい（ある授業では、先生が生徒にお菓子をお皿にもらって食べながら授業していたのを見て、驚いた。）
- ・思っていたより、全員が全員とても背が高い訳ではなかった
- ・授業中にくしゃみをしたら、全員から” Bless You” と言われると思っていたが、実際はくしゃみをした人の近くにいる数人が言ってくれる。
- ・教室に様々な人種の方がいるから、私が留学生であることは言わないと分からない、ということ。
- ・日本が思っていたより浸透している（生徒のカバンにサンリオのキャラクターのぬいぐるみがついていたり、服に日本のアニメのキャラクターが描いてあったりする人を本当によく見かける。）

「学校以外」

- ・私が日本人だ、ということ数回は貶されると思っていたが、今のところ1度もない。むしろ日本から来たことを cool と言ってくれた。
- ・物を厳重に保管していないと、絶対に盗まれると思っていたが、治安はそこまで悪くない（校内でズボンの後ろのポケットにスマホを入れて歩く人がいるほど）
- ・街中を走っている車の7割はホンダやトヨタである。
- ・私のアメリカ人のイメージで、知らない人に話しかけられることがよくあると思っていたが、知らない女性が挨拶をしてくれて答えると、バディに「知り合い？」と聞かれたので、知らない人に話しかけられることに違和感を持つのだと、驚いた。

○心境の変化

「英語」

留学に行くまでは、英語の文を自分で考えて話すことが苦手だった。なぜなら、話している内容が相手に伝わるのか、発音や文法が間違っていないかが不安だったからだ。留学先に着いた日は、話す声が小さくなったり、口数が少なくなったりしていた。しかし、留学中、私は英語を話すことでしか気持ちを伝える方法はない、と覚悟を決めて、ホストファミリーやバディの子など、関われる人とできるだけコミュニケーションをとろうと思っている。今では、ホストマザーの前では英語を臆することなく話せるようになった。

「自分のことをよく考えるようになった」

自分は何が好きであるか、何がしたいのかを明確に言葉にする機会が増えた。それによって私が好きなもの、ことに気づくことができた

○これから

- ・留学中、どんな小さなことでも何かしていただいた事に気づいたら、感謝を伝えるようにしているが、これはこれからも継続していこうと思う。日本に帰国しても続けたい。
- ・自分で決めた観点の結果が変わるのかを視野に入れつつ生活していきたい。

カナダコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高1 Kさん）

○ホームステイ

家族

ホームステイ先の家族はとても親切で料理が上手です。初日、私はとても緊張していたのですが、温かく迎えていただき「ここは貴方の家なんだからリラックスしてね!」と言ってくれました。ホストマザーはフランス語が第一言語でたまにフランス語を教えてくださいます。また、親戚の方が多く近くに住んでいるのでよく食事に招待してくれます。最近は小さい男の子達とも少しずつ仲良くなれた気がします。

ご飯

毎朝、昼は基本的に自分で作り、夜ご飯は作っていただいています。この写真はカナダで定番だと言っていた夜ご飯です。バターとお肉、ジャガイモや人参が入っています。食べ方はまずジャガイモをフォークでつぶしてお肉も少しほぐしたら、手作りのソースをかけて食べます。バターとソースがすごく合っていて美味しかったです。他にもカレーを作ってくれたりしました。また、夕飯のときによく話すのですが私の言いたいことを頑張って聞き取ってくれたりして話が弾みます。



○学校について

生活

正直友達を作るのは予想よりも難しいです。しかし皆とても親切で明るいので少しずつ緊張がほぐれてきました。また、先生方も気さくな方が多くよく話しかけてくれます。How are you? という挨拶にも慣れてきました。また、カナダはアジア人が多いと聞いていましたが私の通う学校ではアジア人を見つけるのが大変なぐらいいません。最初は驚きましたが大分慣れました。制服はありますが、髪型やメイクなどは基本自由で好きなようにしています。私はすごくお喋りな性格なので、英語で自由に話せないのはもどかしさがありますが少しずつ頑張っていきたいと思います。

学習面

私はドラマ、化学、英語、数学を受けているのですが、とても大変です。先生の話についていくのも難しく、ほぼ毎日課題があります。なので放課後どこかへ寄り道する暇はなく毎日家に帰ると課題に取り組んでいます。テストや小テストも定期的にあるのでそのために勉強する必要があります。Scienceのレポートが一番大変ですが授業でできた友達に教えてもらったりしているのでとても充実しています! また、友達に提出日が“a due date”だということを教えてもらいました。放課後、図書館で課題に取り組むこともあり、捗るのでお気に入りの場所です。

○さいごに

カナダにいる間、沢山の文化に触れて残りの留学を全力で楽しみたいです。おそらく大変なことが他にもあると思いますが楽しみたいです! !

カナダコース留学生 中間報告書より1部抜粋（高2 Sさん）

カナダの冬は厳しく、平均でも氷点下、寒いときは -30°C 近くまで下がります。また、見渡すと一面が雪なので思う存分雪を楽しめます。公用語も2言語で、移民の受け入れが多い国なので多様性を感じることができます。

カナダに来て驚いたことは、バスでのことです。連結バスや2階建てバスは運転手が後方まで見えず、自分が降りたいバス停で降りられないことがあるので、皆降りたいところの1～2つ前にドア前で待機しています。

私のホームステイ先はホストマザー、ホストシスターが2人います。ホストマザーは英語以外にもフランス語を話せるユーモアのある人です。先生をしながら、他にも2つのビジネスをこなしています。大学生のホストシスターは大学に行きながら、誕生日や卒業式などに依頼した家や学校を訪れ、段ボールで作った切文字やイラストを設置しに行くというビジネスをしています。もう1人のホストシスターは、芸術系が上手で毎日ピアノを弾いたり、絵を描いたりしています。日本のアニメが好きで、アニメについて話したりしました。私がオタワに到着した日に玄関先にサインがあったり、家の中に上がると、ピアノを弾いてくれたり歓迎が温かくとても嬉しかったです。ホストファミリーとはショッピングや映画を見たり、折り紙をしたり、日本食を作ったりして過ごしています。

学校は St. Mother Teresa High School という学校に通っています。ここは留学生（特に日本、中国、ベトナム、イラクから）が多いため、驚かれたりすることはほとんどありません。授業は日本よりもディスカッションが多く、発言するということが当たり前で、皆が話しやすい雰囲気の授業がなされています。正直、まだ先生や生徒の話すスピードが速く、もちろんスライドも英語なので理解するのがやっとで、なかなか追いつくことはできませんが、私の中でできることを最大限し、授業に取り組んでいます。

周りの生徒や先生はとても親切で、分からないことを質問したら丁寧に答えてくれます。私が1番好きな Health for Life という教科で、フットボールをしたとき、ハイタッチをしたり、褒めあったりとスポーツを通して仲良くなれたことがとても嬉しかったです。

この2週間程は尋ねられた時に何度も聞き返す、また、とっさに英文を作って話すのが大変で短文で返してしまい、上手くいかないことばかりで葛藤を繰り返していました。残りの1ヶ月半弱は多くの方達との関わり、自主学習から英語を上達させ、日本では体験できない新たな発見をしていきたいです。また、お世話になっているホストファミリーに感謝を言動・行動で伝えたり、様々な日本食を作ったり、日本からのお土産で会話を膨らませながら文化の相互理解をしていきたいです。



「グローバル人材とは？」

国際教育部 部長 天田 奈穂子

グローバル社会、多様性、VUCA の時代、Society 5.0 、シンギュラリティ…

現代を表すキーワードが身の回りに溢れており、これからの社会を生きてゆく中高生にとっては、時代の趨勢を見極めることがこれまで以上に求められています。多くのキーワードに共通しているのが「グローバル人材」であり、この1年、「そもそもグローバル人材ってどんな人？」という問いに対する答えを考え続け、生徒にも問いを投げかけてきました。

2020 年の幕開けより新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、海外研修を含むほとんどの国際教育プログラムが中止、または延期となっていました。2022 年度多くを再開することができました。3 年振りの実施となるため、国際教育部としては徐々に平常運転に戻してゆこうと考えていましたが、この1年を振り返ると高速道路を走り続けた感覚です。世界では戦争が長く続いている国々もあり、生徒や保護者の方々に国際問題を考える機会を持ってもらうために、コロナ前より多くのイベントを実施して終わりました。

イベント実施に際し、駐日ウクライナ大使セルギー・コルスンスキー氏、朝日新聞社春日氏、同竹花氏、Allesgood 代表勝見氏、JICA 海外協力隊の方々、外務省山崎氏など多くの方々にご協力いただき、改めて感謝申し上げます。

この度、2022 年度の国際教育プログラムを報告すべく、冊子にまとめることとしました。多くは本校ホームページに掲載した文章や写真ですが、生徒が積極的に外部プログラムに参加し、その感想を書いたものもあります。今年はなかなか一歩を踏み出せなかった生徒の皆さんも、本校 6 年間国際教育プログラムの一貫で学校を通して参加できるプログラムとは別に、是非個人でも自発的にプログラムに参加し、国内外の問題に対し自分なりの「問い」を考え続けてほしいと願っています。それを踏まえて、本冊子のタイトルを“Beyond SGL”（学校が用意している Tsumatama SGL を基盤として更に先へ進む）としました。

そして最後に、生徒の皆さんにとって「グローバル人材」とはどんな人ですか？

2023 年度以降もコンフォートゾーンを抜け出し、多くの情報に触れて経験を重ね、その答えを探し続けてみてください。

2023 年 3 月



Beyond SGL

Global Education Program 2022 Report

大妻多摩中学高等学校

国際教育部

2023 年 3 月発行